



十河の季節、秋が来た。毎年行われる展覧会は、その都度、時間の流れを感じると共に、この国の停滞はいつから始まりいつまで続くのだろうかとも考える。そしてこの停滞が止むことはあるのだろうか、これは停滞なのか、それなら再び繁栄は来るのか、反映とはバブル経済か、高度経済成長期か、明治維新か、そうであるとするならば、停滞と繁栄など、この国にあるのだろうかを考える。そう考えるのは、当然、十河の作品の力からなのである。

十河は過去の作品を素材として利用したり、改変したりして、完成することはない。ステップスギャラリーオーナー、吉岡まさみのブログによると、今回で完成、終了とあるが、私はそうは思わない。十河の作品は、絶対に完成することなどないのだ。そして、完成してはいけない。いつまでも、怨念のように、シーシボスの神話のように、繰り返されなければならないのだ。それこそが、この国と闘う手段ではないかを感じる。それを、我々は見守り続ける。ずっと。

今回の展覧会、十河は大小 15 点の作品を出品した。数が多いにも関わらず、すっきりとした展示であった気がする。いつもはギャラリー内に入ると圧迫される感触を持つのだが、今回は違った。何故違うのか。私が変わったからである。私が変わったといっても、成人がそう易々と変わる訳がない。私は今回、十河の作品に対する見解を変えた。どのように変えたかという、批評者の経験を捨てて、美術を知らない人に成りきったのだ。

するとどうだろう。十河の作品は街に溢れる大企業の広告に比べて上手すぎて、迫力はあってもインパクトがない。大企業の広告はもっと目を引くが、十河の作品は何が言いたいのか分からない。それどころか、ギャラリーに居たくなかった。なぜなら、見たくないからである。そうか、十河はこの「俺の作品を見たくない奴は見ないでくれ」というメッセージを込めていたことが、ここまで自己を落とし込んで、初めて理解できたのであった。見るとは何か。

